

専大マメ知識

優秀学生に授与される「川島記念賞」。 川島正次郎先生が学生に贈った最後の言葉。

今年も専修大学から多くの学生が社会に巣立ったが、卒業式の晴れの舞台において、学術、体育の分野で優秀な成績を収めた学生に贈られたのが「川島記念賞」だ。

この賞は専修大学の発展に大きな足跡を残した川島正次郎氏の寄贈基金をもって設けられた「川島記念学生表彰基金」を基にする。

川島正次郎氏は1914年専修大学を卒業。東京日日新聞（現毎日新聞）政治部記者などを経て政界に転身。国務大臣や自民党幹事長、副総裁を歴任、総裁（首相）選出などで党内の調整役としての手腕が政界で評価された。教育界の発展にも貢献し、母校の専修大学では1953年から70年まで、80歳で死去するまでの間、理事長、総長などを務めた。

70年3月、卒業生に川島総長が贈った言葉は今も語り継がれる。「泥にまみれた著名人になるよりも、善良で愛と親切に徹した社会人として立派な社会づくりに参加してほしい」

そして、「私は今年すでに80歳、おそらくふたたび会う機会はないでしょう…さようなら、さようなら！」と結ぶと、会場から大きな拍手が起こり、いつまでも鳴り止むことがなかった。



川島正次郎先生



2018年度川島記念賞受賞者（2019年3月22日、日本武道館）

専大のシンボル「黒門」、そして「黒門祭」。

神田キャンパスの一角。専大通りに面して、漆黒の門が厳かに建つ。「黒門」と呼ばれるこの門は、専修大学のシンボルとして2010年に育友会が神田キャンパスに復元し寄贈したものだ。黒門は、なぜ専大のシンボルなのか。

専修大学の前身「専修学校」は1880（明治13）年に銀座の地に誕生した。その後、1885（明治18）年に現在の神田の地に新校舎を設置。その後、入学者急増に伴い1888（明治21）年に校舎を増築したが、このとき旗本屋敷の黒い冠木門（柱の上方に横木を渡した屋根のない門）が校門となった。そのため当時、東大の「赤門」に対して、「黒門」と呼ばれた。1907（明治40）年の校舎改築によって黒門は姿を消すことになるが、「黒門の専修」の愛称はその後に残る。現在の門は、当時の資料を基に精密に再現したものだ。

毎年、6月には文化サークル発表の場として「黒門祭」が開催されているが、この名は1967（昭和42）年の第1回開催時に、「黒門の専修」の愛称にちなんで名付けられた。今年の黒門祭は6月28日（金）～30日（日）に開催される。



現在の黒門



1899（明治32）年頃の黒門（風俗画報増刊号『東京名所図会 神田区之部上巻 第193号』明治32年7月25日・東陽堂発行）